

東洲齋写楽の役者絵の数量分析

A Quantitative Analysis of Portraits of Kabuki Actors Drawn by Syaraku

村上 征勝*

祖父江 早苗**

Resume:

東洲齋写楽（生没年不詳）の描いた歌舞伎役者の顔の形状に関し、目、鼻、口、眉毛などの顔の部位間の角度情報を用いた分析で、写楽は女性の役を演じる男性役者（女形）の顔は面長に、男性の役を演じる立ち役の顔は丸顔に描いていること、また、6人の役者の顔の分析から、写楽はそれぞれの役者の特徴を把握し顔を描き分けていることを数量的に明らかにした。

1. はじめに

コンピュータの進歩・発展に伴い、文学や考古学などの文化事象に対する数量分析の研究が行われるようになってきた。しかし、絵画の数量分析はいまだ黎明期にある。これまでの絵画に関する研究は、美の評価という芸術的な観点からの感性的、主観的なアプローチか、製作時期の推定、真贋の判定などの問題解明のための、製作技術・様式の分析や、画材（絵具、キャンパスなど）の科学的な分析によるアプローチが中心であった。

しかし近年、画家の描き方の特徴を、色彩の数量分析や、描かれている人物の顔の形状の数量分析で明らかにしようとする研究が試みられるようになった。前者は絵画の色彩美の観点からの研究、後者は絵画の形態美という観点からの研究ということが出来よう。

2002年に、山田奨治ら[1]は浮世絵・美人画に描かれた女性の顔を対象として絵師の描画法の数量分析について報告している。この中で山田は11人の浮世絵師の描いた顔の、輪郭、目、鼻、口、眉、耳などのパーツを、それぞれ幾つかのパターン（型）に分類し、それぞれの顔について、輪郭はⅠ型、目はⅢ型、鼻はⅠ型、口はⅡ型、耳はⅡ型といったデータを作った。そして、このような顔のパーツに関するデータを、質的（定性的）データを用いた分類の手法である数量化Ⅳ類で分析し、描かれた顔から11人の絵師の作風による分類を試みている。

¹この論文の中で埴原和郎は、顔の幾つかの点の

位置を測定し、それらの中の2点間の距離を用いて11人の浮世絵師の描いた顔を主成分分析で分析し、絵師の描き方の類似性を検討している。

山田[2]はまた顔の輪郭線に注目し顔の分類を試みている。鈴木春信、喜多川歌麿、溪斎英泉の3人の絵師の描いた85枚の顔の輪郭線の曲がり具合を表現する特徴量を計算し、判別分析法で、78.8%の判別率を得たと報告している。

2. 写楽の役者絵

この小論の分析対象は東洲齋写楽の浮世絵版画である。写楽の活動時期は寛政6年(1794)年5月から寛政7年(1795)年1月までのおよそ10ヶ月間であるが、彼はこの短期間に歌舞伎役者の絵（役者絵）を中心に140点余りの作品を発表している。

写楽の活躍期間の短さについて、大田南畝の『浮世絵類考』（1800）には、「是また歌舞伎役者の似顔をうつせしが、あまりにも真をえがかんとて、あからさまにかきなせしかば、長く世に行われず、兩年にて止む」とある[3]。

役者の顔をありのままに描いたとすると、女形を演じる男性役者の顔もありのままに描いたのであろうか。男性の役者の顔を女性らしく見えるように、何か描き方に工夫をしていたのではないのか、というのが写楽の役者絵についての最初の疑問である。

次の疑問は、写楽は役者の顔の特徴を把握し役者の顔を描き分けていたかについてである。役者絵は似顔絵であり、したがって、演じてい

*むらかみ まさかつ（同志社大学文化情報学部）

**そふえ さなえ（泉州銀行）

る役者が誰かわかるように描く必要があるが、そのように描いていたのであろうか。

この2つの疑問を解決するために、役者の顔の形状を数量的な観点から分析する。

3. 分析方法

顔の形状を数量分析するために、顔の輪郭、目、鼻、口、耳などの顔のパーツの計37箇所の点の位置を測定し(図1)、この37箇所の点の中の三つの点を結んで出来る角度の中から以下の12種類の角度を分析に用いた。

いま、点a, b, cを結んで出来る角度を $\angle a, b, c$ で表示すると、分析に用いた12種類の角度は

- $\angle 32, 0, 28$ 、 $\angle 6, 0, 2$ 、 $\angle 7, 0, 3$ 、
- $\angle 1, 10, 12$ 、 $\angle 1, 17, 21$ 、 $\angle 1, 10, 11$
- $\angle 10, 0, 12$ $\angle 1, 16, 0$ 、 $\angle 1, 17, 21$ 、
- $\angle 3, 2, 4$ $\angle 7, 6, 8$ $\angle 1, 21, 24$

である。分析に角度情報を用いたのは、角度は、顔の大きさに関係しないという利点があるからである。また分析は、相関行列を用いた主成分分析で行った。

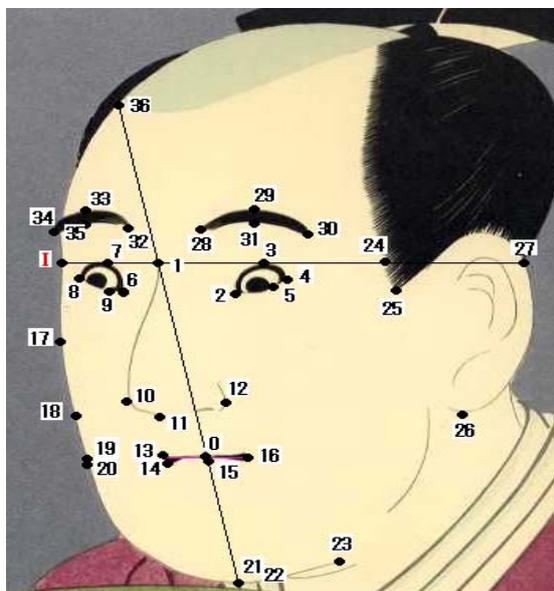


図1 顔の37の測定点

4. 女形と立役の顔の数量分析

4.1 女形と立役の描き方の差異

女形と立役の顔の描き方を調べるため、写楽が7作品以上描いている、三代目沢村宗十郎(8作品)、三代目市川八百蔵(9作品)、三代目市川高麗蔵(9作品)の立役3人と、三代目瀬川菊之丞(7作品)、四代目岩井半四郎(8作品)、中山富

三郎(8作品)の女形3人の計49点の顔を分析に用いた。

描かれた顔の類似性を調べるため、49点の顔に関する前述の12種類の角度情報を主成分分析で分析した。第1主成分を横軸に第2主成分を縦軸にとり、49点の顔を配置したのが図2である(第2主成分までの累積寄与率は0.528である)。

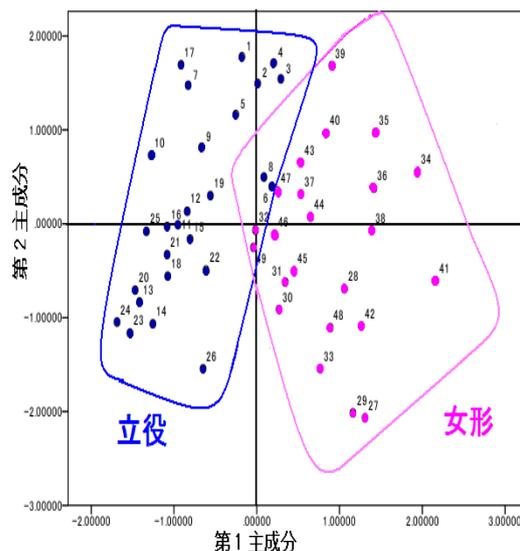


図2 女形3人と立役3人の役者の顔49点の主成分分析結果

この図では形状が似ている顔ほど近くに位置するが、女形と立役の顔が位置する範囲をそれぞれ線で囲ってみると、左側に立役の顔が右側に女形の顔が集中していることがわかる。

つまり、描かれた役者が異なっているにもかかわらず、立役の顔と女形の顔はそれぞれまとまっており、このことから、写楽は女形を演じる男性役者の顔を女性らしく見えるように工夫し描いているように思われる。

立役と女形の顔の描き方の違いは第1主成分に表れているが、この第1主成分がどのような意味を持っているかを検討してみると、立役は鼻が多少尖った形で目は丸く、顔も女形に比べると丸顔に描いており、それに対し、女形は鼻は丸みを帯びた形で、目は細く面長な形に描いていることが判明した。

女形と立役の顔の描き方の差異については村上、浦部[4]でも示されている。分析に用いた写楽の絵や角度情報はこの小論で用いたものと多

少異なるが、やはり相関行列を用いた主成分分析で、立役の顔と女形の顔の描き方に違いがあることが示されている。

なおこの論文[4]の中では、写楽と活躍期が重なる歌川豊国(1769-1825)と活躍期が写楽より遅い歌川国芳(1798-1861)の役者絵についても女形と立役の顔の差異が分析されており、写楽、豊国、国芳の三人の浮世絵師の中で、女形と立役の描き方の差異が最も顕著に表れていたのは写楽であることが明らかにされている。

役者の顔をありのままに描いたために人気が出なかったとされている写楽ではあるが、顔の部位間の角度情報の分析からは、女形の役者の顔は立役の役者の顔とは異なり女性らしく見えるように描いていたと考えられる。

4. 2 女形の顔の数量分析

写楽の描く女形の役者の顔については、描き方に共通したところがあるように思われるが、役者絵である以上、描かれている役者が誰であるか、役者の顔の特徴を把握して描き分ける必要がある。

実際に女形の3人(三代目瀬川菊之丞(7作品)、四代目岩井半四郎(8作品)、中山富三郎(8作品))の役者の顔は描き分けられているだろうか。女形の顔26点を主成分分析で分析した結果が図3である。第2主成分までの累積寄与率は0.594である。

3人の役者の顔の位置する範囲を線で囲んでみると、瀬川菊之丞と中山富三郎の顔の範囲が

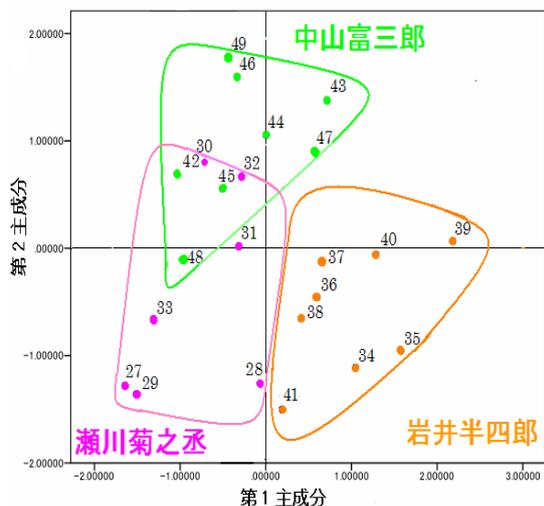


図3 女形の顔の主成分分析の結果

多少重複しているものの、役者ごとにかなりまとまっており、写楽は各役者の顔の特徴を把握し描いていることが分かる。

主成分の意味の解釈からは、3人の顔の描き方について次のようなことがいえる。

瀬川菊之丞は、第1主成分が小さいので、他の女形に比べて面長で鼻は尖った形に、また第2主成分も小さいので、目は細い形に描かれている。

岩井半四郎は、第1主成分が3人の役者の中で大きいことから、他の女形と比較し、丸顔で鼻も丸みを帯びた形に、また第2主成分が小さいことから、目は瀬川菊之丞と同様に細い形に描かれている。

中山富三郎は、女形3人の中で第2主成分が最も大きいことから、目は丸みを帯びた形に、また第1主成分が小さいことから顔は面長に、鼻は尖った形に描かれている。

したがってこの分析から、写楽は女形の顔を描く場合、役者それぞれの顔の特徴を把握し描いていたと考えられる。

4. 3 立役の顔の数量分析

女形と同様に、立役3人(三代目沢村宗十郎(8作品)、三代目市川八百蔵(9作品)、三代目市川高麗蔵(9作品))の顔26点を主成分分析で分析した結果が図4である(累積寄与率は0.566である)。

この図を見ると、描かれた顔は女形の場合よりもさらに役者ごとにまとまって分布していることが分かる。

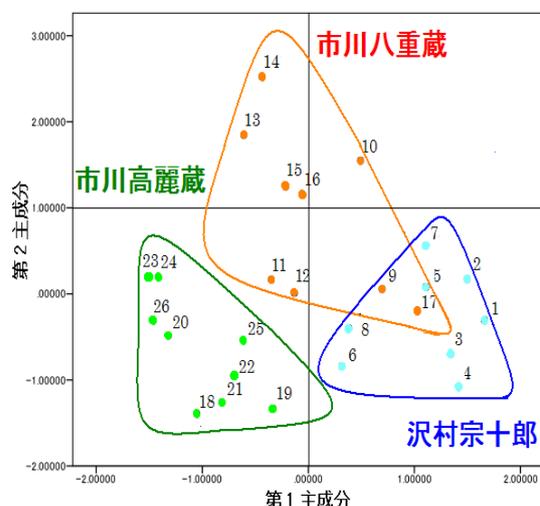


図4 立役の顔の主成分分析の結果

主成分の意味の解釈から、立役の3人の役者の顔の描き方について次のようなことがいえる。

三代目沢村宗十郎は、第1主成分が3人の役者の中で最も大きいことから、他の立役より丸顔で鼻は丸い形に描かれている。

市川高麗蔵は、第1主成分、第2主成分ともに値が小さいことから、他の立役に比べ面長で鼻は尖った形に、目は細い形に描かれている。

三代目市川八重蔵は、第1主成分に関しては真ん中の位置に分布し、第2主成分が3人の役者の中でもっとも大きいことから、目が他の立役に比べ丸みを帯びて描かれている。

図3と図4を比較してみると、立役の顔の方が女形の顔より描き分けが明瞭であり、より役者の顔の特徴が把握されていると考えられる。

5. 終わりに

東洲齋写楽が7点以上描いている女形3人、立役3人の役者の顔49点を用い、顔の部位間の12種類の角度情報を用い、顔の描き方を主成分分析で分析した。

その結果、役者の顔をありのままに描いたとされる写楽ではあるが、女形を演じる男性役者の顔は女性らしく見えるように工夫しており、また女形、立役ともそれぞれの役者の顔の特徴を把握し、演じている役者が誰であるか分かるように描いている可能性が高いことが明らかになった。

ただこの分析結果は、顔の部位間の12種類の角度情報を主成分分析で分析するとこのようなことがいえるということであり、この分析結果の妥当性については、さらなる数量分析と浮世絵の専門家の研究を待たねばならない。

参考文献

- [1] 山田奨治、早川聞多、村上征勝、埴原和郎（2002）「浮世絵における顔表現の科学」、日本研究、25、13-19
- [2] 山田奨治（2000）「文化資料と画像処理」、勉誠出版
- [3] 瀬木慎一（1985）『写楽実像』、美術公論社
- [4] 村上征勝、浦部治一郎（2007）「浮世絵における役者の顔の描画法に関する数量分析」、統計数理、Vol.55、No.2、223-233